

ガラテヤ人への手紙4章7節 「神の相続人」

1A 神の子

1B 養子

2B 父なる方

3B 奴隷の下

2A 相続人

1B 神のかたちにある相続

2B 今、与えられる満たし

3B 神の国

本文

ガラテヤ人への手紙4章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ガラテヤ3章まで来ました。午後に、4章の前半を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、4章7節に注目します。「ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人です。」今朝は、とても大切な真理を見ます。私たちがイエス・キリストを信じたことによって、神の子どもになったこと。そして、神のものを相続する、神の相続人になったことを見ていきます。

冒頭から、暗い話になってしまい、すみません。私は、安倍元首相が凶弾で倒れるという、痛ましい事件で心の衝撃はまだ残っています。その犯人がなぜ安倍さんを殺害したのか、その動機に注目する時に、「孤独」でるとか、「生きがいのない人生」であるとか、社会に絶望している人々が、殺傷事件を犯すことを、多くの人が指摘しています。

これまで日本で起きた事件を列挙すると、2008年の秋葉原通り通り魔事件、2016年の神奈川県の障害者施設殺傷事件、2019年の京都アニメーション放火殺人事件などがあります。これらの人々は、「どうせ死ぬなら他人も殺してしまおう。」という方向に向かってしまうのだ、という論評がありました。¹アメリカでの乱射事件にもそういった事例がありますし、イスラエルでは、パレスチナ人が、自殺願望があるのでユダヤ人をナイフで刺して、イスラエルの治安警察によって射殺されて、死を遂げるという事例もあります。そういった人々が、友だちがいなかったり、話し相手が少ないために、自分の思い込みや妄想、極端な思想に染まって、事件を起こすのかもしれません。

ですから、「居場所が必要だ」としばしば言われます。自分がそこに居て、自分の存在価値を見いだすことができる場所です。以前は、働くところ、職場が居場所になっていましたが、働くこと以外でのコミュニティー、共同体が必要だとはしばしば言われます。そこで、私は思います。なんと教会

¹ <https://president.jp/articles/-/59604>

は、社会に対しても貴重な場を提供してくれていることであろうか！ということです。それは、「存在していることに、価値がある」場だからです。「いてくれて、ありがとう！」と、本気で言える場だからです。何かをしたから、私たちはあなたを認めるということではなく、「神の恵みによって、あなたは、今のあなたになったんだよね。」と言ってくれるところです。マルタとマリアの兄弟ラザロのことを思いますが、彼は何もしていないのに、人々が集めって見に来ていました。死んでいたのに、よみがえったからです。イエス様によって変えられているということだけで、その存在に価値があるのです。

私たちは前回、ガラテヤ 3 章の最後のところで読みました。「3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」キリスト・イエスにある、とうことは、存在を示しています。そして、自分がキリストの中にあるということが、同じくキリスト・イエスにある者と一つにするのです。ここに居場所があります。そして、今朝の本文、私たちは、神の子どもであり、子であるならば相続人ですというのは、とてつもない存在意義を与えます。自分が生きているということに価値があり、自分が何かをしたからではなく、ただ父なる神が愛されているから、生きがいがあるのです。

1A 神の子

私たちが、イエス様を主として、この方に自分の人生を明け渡す、つまり、この方を信じたら、神が素晴らしいことを私たちにしてくださいました。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」神によって生まれたのです。私たちは一度、肉によって生まれていますが、イエスを信じる時に、神の霊によって、霊的に生まれます。神の子どもになります。そして、これは人の意志とか、肉の望むところ、つまり私たちの意欲でもないのです、もっぱら神によって生まれたのです。私たちが生まれる時に、私たちの意欲や努力が全くないことに気づくと思います。神がご自分の霊によって始められ、私たちが御霊によって導かれます。ですから、私たちがキリスト者として生きていくのは、誤解を恐れずに言うと、とても神秘的です。人が、どうこうするものではないからです。神のなされることを、私たちはただ見て、信じ、この方をあがめるしかないのです。

日本語の聖書では、「神の子どもとなる特権」と訳していますが、これは単に「力」とも訳せることばです。どちらの意味もあるでしょう。力ということに注目すれば、私たちに慰めを与えます。「Iヨハ 3:9 神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。」私たちが神から生まれているのであれば、神のご性質が与えられています。新しくされています。たとえ、たとえ罪を犯しても、罪の中に留まることはできません。神が、悪い者が私たちに触れないように守ってくださっています。思い出すが、モアブの草原に宿営していたイスラエルの民ですが、バラムがいくら呪おうとしても、神がそれを祝福に変えられました。バラムが、こう預言しました。「民 23:21 ヤコブの

中に不法は見出されず、イスラエルの中に邪悪さは見られない。彼らの神、【主】は彼らとともにおられ、王をたたえる声が彼らの中にある。」イスラエルの民はどれほど、罪を犯したことでしょうか？それにも拘らず、悪の力に対して、主は「不法は見いだされぬ。邪悪さは見られない。わたしが彼らと共にいる。」と言っておられるのです。このように、神によって生まれた者は、悪魔から私たちを守ってくださいます。

1B 養子

そして、もう一つの意味、「特権」についても考えてみたいです。ここガラテヤ書では、神の子どもになる特権に焦点を合わせています。神の子どもになる恵み、その特権は、天地創造の神、聖なる、正しい方を父ということのできる関係です。先ほど、孤独や疎外感の話をしました。けれども、神にとって私たちは、何十億もいる人々の中の一人ではないのです。機械のネジのようにみなす社会の中に生きて、疎外感を抱くのですが、この方を父と仰ぐことができるのです。手前の6節に、「4:6 そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。」とあります。アバは、アラム語でお父さん、あるいはお父ちゃんという、幼い子がお父さんと呼ぶ時の呼び名です。そして、父よは、恐れ敬う呼称ですね。

いうならば、神はご自分の家族を増やす働きをしておられる、と言ってもいいと思います。イエス様のことは、使徒ヨハネが、「父のふところにおられるひとり子の神」と証しています(ヨハ 1:18)。初めから、神が天地を造られる前から、キリストはこの方を父とし、父はこの方を子としていました。そして、ただひとりの子であります。だれにも比べることのできない、比類なき父子の関係です。父が神であるから、子も神です。そして父と子とは一つであり、ひとりの神です。この独特な関係のゆえに、イエス様は生まれました。主が、宮清めを行われた時に、「わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」と言われました(ヨハ 2:16)。ユダヤ人たちが、天地を造られた神の宮に来ているのに、イエス様はさらっと、ここは自分のお父さんの家なのだ、と言い切ったのです。安息日に、38年間、足なえだった者を立たせた時も、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。(ヨハ 5:17)」と言われました。ユダヤ人はイエスを殺そうと思いましたが、それは安息日を破っていただけではなく、「神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。(5:18)」と、ヨハネは解説しています。

そして、私たちが神の子どもになるというのは、この父と子の中にある交わりに、私たちを招き入れておられるということなのです。「ヨハ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」これは、とてつもない招きですね。父は子をこよなく愛し、子は父からすべてのものが任されています。子は父の言われることに聞き従います。その交わりにおいて一つです。その交わりを、子を信じる者たちにも分け与えて、そこにある喜びを知るようにして下さったのです。

これは、すごいことです！イエス様は、よみがえられてから、弟子たちのことをご自分の兄弟と呼ばれました。ご自身が長子、つまり長男となられて、私たちが彼に連なる者となって、父なる神を私たちも父と言えるようにして下さったのです。マグダラのマリアに、主は言われました。「ヨハ 20:17b わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」このようにして、神のひとり子として持つておられる父なる神との交わりに、私たちを招き入れてくださいました。

しかし、もちろんイエス様は神であられ、私たちが神の子どもとなることによって神になるのではありません。私たちはあくまでも人です。神の御霊によって交わりはありますが、それは私たちが人から神になることを意味していません。イエス様と父との関係が永遠で、特別なのに対して、私たちは、養子縁組に入れられたのです。ガラテヤ 4 章 5 節には、「私たちが子としての身分を受け

るためでした。」とあります。養子とは、血筋がつながっていないのに、同じ身分を与えるということです。つまり、私たちは神ではないのです。イエスは神です。神から生まれた方ですが、神なのです。永遠の昔から、神のひとり子です。しかし、人である私たちは、ひとり子なる神に与えられた身分が養子として分け与えられた、ということなのです。

2B 父なる方

父なる神が、ご自分の子をこよなく愛されたように、私たちを御子にあって愛しておられるのです。そして、御子が父なる神にあって持つておられる喜びが、私たちの喜びになります。御子が、父なる神にあって持つておられる平安が、私たちにも与えられているのです。それは、私たちが御霊によってキリストに結ばれていて、キリストにあって父との交わりを持つことができているからです。

イエス様は、妬まれました。そして憎まれました。それが、父なる神との関係があったからです。同じようにして、私たちは、その関係自体が妬みの対象となります。「ヨハ 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」私たちが、しばしば、何か人から悪いことを言われたり、行われたりすると、「私が、何か悪いことをしているからかもしれない。」と誤ってしまいます。そういう時もあるのかもしれませんが、違うのです。自分がキリストにつながり、父なる神につながっているから、つまり、神の子どもとしての恵みを見てしまっているから、妬んで、何か悪いことをしてくるのです。

3B 奴隷の下

これが、子となったことでありますが、パウロは、「**あなたはもはや奴隷ではなく**」と言っていますね。子として父に愛されているという関係は、信じた後に与えられているものですが、その前は奴隷でした。ガラテヤ 4 章 3 節で、こう言っています。「4:3 同じように私たちも、子どもであったときには、この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました。」この世のもろもろの霊というのは、当

時、ギリシア神話やローマ神話の中にあつて、風習や慣わしのことを話しています。このような神がいて、きちんと仕えていなければ、こうした災いが来るというものです。だから、これこれを行つて、神々を宥める、怒らせないようにする、というものがあつました。私たちが、神の子どもとなつた時点で、そのような恐れが取り除かれました。神の愛は完全だからです。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなつていないのです。」

日本にも、そのような考えがありますね。罰(ばち)です。先祖のたたりがある、というようなものです。それは、恐れに基づいていて、自分が行わなければ制裁を受けるというものです。今の人々は、私は無宗教です、という人々が多いです。けれども、しっかりと仏教の檀家制度を恐れています。自分がキリスト者となつて、バプテスマを受けたら、先祖の墓を守れなくなるかもしれないという恐れが出てきます。日本では信教の自由がありますから、宗教を変える自由ももちろんあります。けれども、それでも恐れているのは、江戸時代の初期に、家族や親族にクリシタンがいれば、連帯で罰せられるという、当時の住民登録、寺請制度があつたからです。その時の迫害のトラウマが、なんと今に至るまで続いています。そのために、いろくなしきたりを守らないといけなくなります。その意味が何であるかは、ほとんど考えられずに、「このしきたりを守らなければ、制裁が来る」ということを恐れているから、しきたりを破らないでいるのです。しかし、私たちが、神の子どもとなることによって、恐れから解放されたのです。

2A 相続人

そして、「子であれば、神による相続人です。」と言っています。神は、御子にご自身のすべてのものを任せられました。そして、キリストのうちにある者は、御子に任せられたものを自分も任せられて、共同の相続人となっているのです(ロマ 8:17)。

私たちは、父なる神に愛され、父のものをキリストにあつて、任されています。みなさんの中に、祖父母の相続や、両親の相続を受け取つた方はいらっしゃるでしょうか？これは、完全に恵みです。自分が労して得たものではありません。ただ、そういった関係があるため、孫であつたり子であるからという理由だけで、相続を受けるのです。ガラテヤ 3 章 18 節にも「相続の恵み」と書かれています。

1B 神のかたちにある相続

私たちが、人としての尊厳をどのようにして持つのか？冒頭にも、生きがいについて話しましたが、人々が語っている生きがいは、どこから来ているのでしょうか？聖書では、人が神に造られた時に、万物が任せられました。「創 1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」人は、神のかたちに造られたのですが、神は、すべ

てのものを造られて、それを支配されています。同じように、人がすべてのものを支配する、あるいは任せられるというところで、その存在目的があるのです。ですから、私たちが何かを任せられることが、生きていることを教えてくれるのです。

みなさんは、家庭において、仕事において、そして教会において、何かを任せられることを、否定的に捉えていませんか？そこには罪の残像が残っているんですね。罪を犯したから、仕事が汗水流さなければいけなくなりました。茨が生えるようになってしまいました。けれども、元々はそうでなかったのです。けれども、もしその任せられていることがなければ、自分が自分として生きているということも失ってしまうでしょう。そういったことで、相続するということがあるのです。神のものを任せられるのです。

2B 今、与えられる満ちし

神がアダムに、造られたものを支配するように命じられましたが、神の子どもとなった者たちは、キリストが地上に来られる時に、被造物を従わせることとなります。「ロマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」

ですから、今の被造物、自然を見る時に、私たちは、そこにある神の栄光、やがて、さらに、何十倍にも輝く神の栄光を思い巡らすことができるのです。それらは、私たちの相続になります。花も、山も、風も、大海も、イエス様の再臨によって解放され、それらを楽しむことができるのです。このことを主題にした、日本人の牧師さんが作詞した歌がありますね。「花も」です！

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1.ここに いずみはわく | 花も雲も 風も大海も |
| 涙をすぎるとき | かなでよう かなでようイエスを |
| やがて 実を結び | 空にひびけ 歌え魂よ |
| 笑い声に満ちる | 恵みを 恵みを 恵みを |
| 2.あおげ 天はひらき | 花も雲も 風も大海も |
| 僕らは見るだろう | かなでよう かなでようイエスを |
| やがて 花は咲き | 空にひびけ 歌え魂よ |
| 栄光の主が来られる | 恵みを 恵みを 恵みを |

私たちは、すばらしい自然を今から、相続していることを喜びながら、満たされることができます。

3B 神の国

そして、主が来られた時に、私たちは神の国を受け継ぐこととなります。神が王となり、正義と平和に満ちているこの国を、私たちに下さるのです！ライオンが牛と共に草をはむ国です。病んでい

る人が完全に癒されている国です。荒野に水が流れる国です。そして何よりも、神殿に主イエスが御座におられ、教え何という恵みでしょうか！黙示録には、七つの教会に対するイエス様のことがありますが。すべての教会に、約束があります。それは、神の国を受け継ぐ約束です。そこでどのような幸いを得るのかの約束です！アブラハムに、多くが任されました。富む者となりました。私たちは、信仰によってアブラハムの子です。世界を私たちに任せ、富む者となるのです。

私たちは忍耐しましょう。パウロは、「使徒 14:22 神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ。」と言いました。そして忠実でありましょう。タラントを任せ、それをもって商売をしたしもべです。イエス様は言われました、「マタイ 25:21 よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」主がこれほどのものを。主は、このような小さき者たちの集まりにも、御国をくださいます。「ルカ 12:32 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。」